

成人看護学実習 B における学生の学びに関する研究

—実習総括記録からの検討—

柘野 浩子*・塩見 和子・磯本 暁子・掛屋 純子・小野 晴子

成人看護学

(2012年11月28日受理)

本研究の目的は、成人看護学実習 B における実習目標 (5) に関する学生の学びを明らかにし、今後の効果的な教育方法を検討することである。自由記載された実習総括記録を分析の対象とし、記述された内容を質的・帰納的に分析した。分析の結果、【援助的人間関係の成立】【看護観の確立】【看護実践力】【看護の質】【看護マネジメント】の5つのコアカテゴリーが抽出された。看護観の確立には体験の認識を意識化することが効果的であること、看護実践力の育成には看護実践の評価への指導が必要であること、臨床の知を得るために看護実践を振り返り洞察することが重要であることが示唆された。

(キーワード)成人看護学実習 B, 学び, 看護実践力, 看護観

はじめに

近年、国民の医療への関心は増し、看護職者に対する期待も大きくなっている。また、医療だけでなく、保健医療福祉のサービスの内容や方法、行われる場が多様化しており、看護職者も役割の拡大が求められ、多職種との連携も重要になっている。そのような中、厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(2011)¹⁾において、看護職者としての「能力」を育成する教育へと転換する方針が打ち出され、看護基礎教育において「看護実践能力」をいかに育成するか、という観点で検討が進められている。

看護学実習は、学生が既習の知識・技術を基に対象と相互行為を展開しつつ、そこに生じた現象を教材として看護実践能力を習得する授業²⁾である。このことは、看護学実習の質・内容が学生の看護実践能力を育成するために、もっとも効果的な授業であることを示している。

そこで本研究では、成人看護学実習 B における学生の学びを明らかにし、看護基礎教育において求められている能力の育成をふまえた実習指導上の示唆を得たいと考えた。

I. 研究目的

成人看護学実習 B 終了後の学生の実習記録から、学生の実習目標 (5) に関する学びを明らかにし、今後の効果的な教育方法を検討する。

II. 用語の定義

1. 「成人看護学実習 B」とは、3 年次生を対象に、臨地において成人期および老年期の健康上の問題をもつ対象の看護実践を通して、看護過程の展開能力と態度を学ぶことを目的とした「成人看護学実習」6 単位のうち、1 回目の成人看護学実習 A (3 単位) を終了した後に行う、2 回目の成人看護学実習 3 単位を示す。

III. 成人看護学実習 B の概要

1. 単位構成と実習目的・目標、実習時間 (平成 23 年度)

1) 単位構成

成人看護学実習は、A・B 各 3 単位 (135 時間) の計 6 単位 (270 時間) で構成されている。A・B は、その学生にとって 1 回目の実習を A、2 回目を B とし、それぞれ異なった施設で実習する。

2) 実習目的

成人各期の健康上の諸問題をもつ対象の看護実践を通して、看護過程を展開する能力と態度を養う。

3) 実習目標

- (1) 成人各期の対象及び対象をとりまく人々との援助的人間関係を成立・発展させる能力と態度を養う。
- (2) 成人期の対象の看護の必要性を認識し、看護過程を展開する。
- (3) 看護チームの機能及び保健医療組織との関連を理解し看護の役割と責任を認識する。
- (4) 自己の看護能力を評価し、今後の学習の方向性を得

*連絡先: 柘野浩子 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

- る。
- (5) 学習の体験を洞察し、看護者として自己の価値観、死生観、看護観を発展させる。
2. 実習オリエンテーション
- 1) 4月の実習ガイダンスの他、成人看護学実習A・B(以下成人看護学実習Aを成人A、成人看護学実習Bを成人Bと略す)各々2回ずつ行う。
- 2) 1回目は、事前オリエンテーションとして実習開始約3週間前に、実習目的・目標の確認及び施設・病棟に関連した事前学習(必要な技術演習も含む)の提示と確認をする。
- 3) 2回目は実習開始前週の金曜日に、各実習施設・病棟の特殊性、実習展開、受け持ち患者の提示および看護技術の確認を実施する。
- 4) 成人Bでは2回目の実習となるため、成人Aでの学びを生かし、さらに発展できるよう導入する。
3. 実習内容
- 1) 対象の理解
- (1) 成人各期の身体的、心理的、社会的特徴と発達課題を理解する。
- (2) 成人期の疾病構造・主な生活習慣病の動向と予防対策について理解する。
- (3) 成人各期の健康障害の特徴を理解し、その援助を学ぶ。
- (4) 成人各期の健康破綻の予防と早期発見、早期治療、健康維持増進活動における看護の役割を学ぶ。
- (5) 健康上の問題をもつ対象・家族・対象の属する集団を理解し、家族との協力の必要性を学ぶ。
- 2) 各健康レベルにおける看護
- (1) 急性期 (2) 回復期 (3) 慢性期 (4) 終末期
- 3) 検査を受ける患者の看護
- 4) 各種療法を受ける患者の看護
- (1) 安静療法 (2) 薬物療法 (3) 食事療法
- (4) 手術療法 (5) 放射線療法 (6) リハビリテーション
- 5) 継続看護
4. 見学実習
- 実習中に、ICUおよび人工透析センターの見学実習をそれぞれ1日行う。
5. 実習方法
- 1) 同意が得られた1~2名の患者を受け持ち、基礎看護学実習I・IIで学んだことを土台にして、成人期にある患者の看護問題(看護診断)を明確にし、看護を展開する。
- 2) 成人A・Bの実習をとおして実習要綱に示している看護を学び、成人看護学実習の目的、目標を達成する。
- 3) 成人看護学実習では老年期患者を受持つことが多いため、実習要綱「老年看護学実習」の目的、目標を参考とする。

- 4) 施設あるいはその病棟それぞれに看護の特徴がある。それらの特徴を活かしながらさまざまな健康レベルや看護内容が学べるように受持ち患者を決める。
- 5) カンファレンス
- 受け持ち患者について、看護師参加のカンファレンスを病棟単位で行う。
- 6) 学内演習
- ・実習開始前に、実習準備として学内演習(文献学習、DVD・VTR等の視聴覚教材による学習、援助技術演習等を各グループで計画)を行う。
 - ・実習週の金曜日は学内カンファレンスや援助技術演習等、各担当教員と調整し計画する。
- 7) 記録
- ・成人看護学実習の記録用紙(I, II, III, IV)を使用する。
 - ・記録物はすべて実習終了後の翌週月曜日、10:00までに担当教員に提出する。
 - ・提出期限も評価の対象となる。
- * 個人情報保護法に基づき、記録物の取り扱いを厳重に行う。
- * アクシデント・インシデント発生時には担当教員と相談の上、報告書を提出する。
6. 日程

	1 週					2 週					3 週					
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	
内 容	オリエンテーション・情報収集	3号紙にて実践	3号紙にて実践	関連図・看護診断	(学内)実習	計画立案(2号紙)	計画に基づき実践・評価・修正	計画に基づき実践・評価・修正	計画に基づき実践・評価・修正	(学内)合同カンファレンス	計画に基づき実践・評価・修正	計画に基づき実践・評価・修正	計画に基づき実践・評価・修正	まとめ・評価カンファレンス	ICUまたは透析見学	(学内)実習

- * 合同カンファレンス
- 実習施設の異なるメンバーでグループワークを行い、実習体験を通しての学びを共有する。
7. 指導体制の実際
- 実習期間中は教員1名が各グループ4名~5名の学生を担当し、原則的に臨床に常時駐在して指導に当たる。臨床には部署ごとに指導者が1~2名おり、交代で指導にあたる。教員は、指導者や病棟管理者と連携をとりながら指導する。
8. 評価
- 実習内容(指導者と協議)、出席日数(全出席)、記録物、課題レポートの提出、到達度試験により教員が評価する。
9. この学生たちは、成人Aに引き続き1週間の統合実習(複数患者受持ち実習)、成人Bに引き続き1週間の統合実習(看護管理実習)を行っている。統合実習は2単位90時間である。

IV. 研究方法

1. 研究対象

C短期大学看護学科3年生で、成人看護学実習Aを終了した後に、成人看護学実習Bを終了した学生63名のうち研究の承諾が得られた58名の実習総括記録。

2. 分析方法

学生が実習終了後に提出した実習総括記録のうち、「実習目標(5)学習の体験を洞察し、看護者として自己の価値観、死生観、看護観を発展させる」の項目についての自由記載内容を分析対象とした。成人領域教員5名で記述された内容を詳細に判読し、臨地実習における学びに関する記述を全て抽出し、類似性に沿って分類した。そして質的・帰納的に分析しカテゴリー化し、コアカテゴリーを抽出した。分析の妥当性を高めるためにスーパーバイズを受けた。

3. 倫理的配慮

すべての臨地実習終了後、学生に本調査の趣旨を説明し、成績には関係しないこと、研究目的以外には使用しないこと、匿名性の保持、自由意思による参加であること、データは研究終了後廃棄すること、公表の旨を口頭で説明し、記録の提出をもって同意が得られたとみなした。

V. 結果

1. 記述内容の構成

実習記録における学びに関する記述から598の記述が抽出され、分析の結果【援助的人間関係の成立】、【看護観の確立】、【看護実践力】、【看護の質】、【看護マネジメント】の5つのコアカテゴリーが抽出された(表1)。以下、コアカテゴリーを【】、カテゴリーを〔〕、サブカテゴリーを<>、サブカテゴリーに関する特徴的な記述を「」で示す。

1) 援助的人間関係の成立

【援助的人間関係の成立】は、看護介入する上で基盤となる関係性の成立についての学びの内容であり、69の記述から、〔援助的人間関係の形成〕〔コミュニケーション〕〔看護の対象の理解〕の3つのカテゴリーが抽出された。

〔援助的人間関係の形成〕は、相手を知ろうという態度で患者と向き合い、時間をかけて継続的にかかわることや、確実な技術による援助の提供や知識により信頼関係が形成されたという体験を意味し、<援助的人間関係の形成><信頼関係の形成>の2つのサブカテゴリーで構成されていた。「援助的人間関係の成立には時間は大切で、少しずつわかかっていくことが大切である」「関係づくりには相手を知ろうとすることの大切さを感じた」「信頼される看護師になるには、知識を持っていることが大事」「患者との信頼関係を築くには看護技術が大切」「信

頼関係成立のためにはある程度自分のことを話すことも必要」などの記述があった。

〔コミュニケーション〕は、相手に合わせて言語的・非言語的コミュニケーションを工夫することで患者・家族理解が深まり、関係形成にもつながったという体験を意味しており、<コミュニケーションの工夫と重要性><非言語的コミュニケーションの難しさと重要性>の2つのサブカテゴリーで構成されていた。「患者が返答しやすい方法を考えた結果、わずかに思いを訴えることができた」「患者さんの理解度に合わせたコミュニケーションの取り方をしないと意思の疎通が難しい」「『握手』でもコミュニケーションがとれる」「家族とのコミュニケーションにより患者の変化を家族と共有することが大切」などの記述があった。

〔看護の対象の理解〕は、患者・家族の存在そのものや役割について考え、さらに疾患をもち治療を受ける患者・家族の苦痛や不安など、その心理を洞察した体験を意味し、<患者・家族の理解><患者・家族の心理の理解>の2つのサブカテゴリーで構成された。「生活歴、社会的背景を知ることの大切さを実感した」「家族のお見舞時は患者の表情が良く、患者にとっての家族の存在の大きさを感じた」「家族から入院前の話を聞き、患者の全体像や家族の思いを知ることができた」「患者も自分の意思を上手く伝えられなくて辛い思いをしていることを忘れてはいけないと思った」「痛いという訴えの中に、さみしさや苦しさなど精神的に満たされない気持ちがある」などの記述があった。

2) 看護観の確立

【看護観の確立】は、体験を通し、それぞれの看護の根幹となる考え方、看護行為を行動化する基となる考え方について学んだ内容であり、161の記述から、〔看護観の形成〕〔看護専門職者としての姿勢〕〔看護倫理〕の3つのカテゴリーが抽出された。

〔看護観の形成〕は、患者に寄り添い看護を展開する中で患者の変化が得られたことから看護の醍醐味を感じ、目ざす看護を思い描いたという体験を意味し、<看護実践による喜びとやりがい><学びの体感><看護観・価値観・死生観の発展><患者に寄り添う>の4つのサブカテゴリーで構成されていた。「歩行に向けたリハビリ前に、一緒に準備運動を行い効果が得られて本当によかった」「輸液や輸血などの処置をみて、その時に必要な観察項目や管理を学ぶことができた」「看護とは患者を精神的に支えること」「看護のベースは、本当にそのことが患者のためになっているのかを考えること」「患者に寄り添い自分にできることを考えて動いていくことが看護」「不安を訴えられた時に声かけを行い不安に寄り添う看護を行うことができた」などの記述があった。

〔看護専門職者としての姿勢〕は、看護実践の体験を真

塾に振り返り、看護専門職者として目ざす方向性と自己の課題への取り組みについての考えを意味し、＜看護師としての姿勢＞＜学習者としての姿勢＞＜振り返りと自己の課題＞＜看護専門職者としての自覚＞の4つのサブカテゴリーで構成された。「謙虚な姿勢で患者と向き合うことが必要」「自己の看護能力を高めていけるよう頑張りたい」「患者の小さな思いにも耳を傾けられるような看護師になりたい」「もっと早く報告・連絡・相談を行うことが課題」などの記述があった。

〔看護倫理〕は、看護実践を倫理に基づいて行うことができるための基本的な患者に対するとらえ方について考

えたという体験を意味し、＜患者の尊厳＞＜生命の尊さ＞＜インフォームド・コンセント＞の3つのサブカテゴリーで構成されていた。「ケアを押し付けず患者の気持ちを尊重してかかわることが大切」「最後まで患者さんの人間としての尊厳を守ること」「命はとても重たいものであり生きている上で死は隣り合わせである」「患者にケアの必要性を理解し実施することができるような対応や関わりが必要」などの記述があった。

3) 看護実践力

【看護実践力】は、看護過程のプロセスを繰り返して実践する中でその技術を深化させ、対象や経過の特徴に沿

表1 成人看護学実習B実習目標(5)の学びの内容

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
援助的人間関係の成立	援助的人間関係の形成	援助的人間関係の形成 信頼関係の形成
	コミュニケーション	コミュニケーションの工夫と重要性 非言語的コミュニケーションの難しさと重要性
	看護の対象の理解	患者・家族の理解 患者・家族の心理の理解
看護観の確立	看護観の形成	看護実践による喜びとやりがい 学びの体感 看護観・価値観・死生観の発展 患者に寄り添う
	看護専門職者としての姿勢	看護師としての姿勢 学習者としての姿勢 振り返りと自己の課題 看護専門職者としての自覚
	看護倫理	患者の尊厳 生命の尊さ インフォームド・コンセント
看護実践力	看護過程展開の技術	継続したかわり 看護過程展開技術 観察の重要性と患者把握 根拠に基づく看護実践 予測性のある看護
	家族看護	家族看護
	継続看護	継続看護
	対象・経過別看護	周手術期看護の特徴 急性期看護の特徴 慢性期看護の特徴 終末期の看護 高齢者看護の特徴
看護の質	患者中心の看護	患者にとって最善の看護 患者の立場に立った看護 患者に必要な看護 患者に合った看護
	個別的な看護	個別性のある看護 自立の促進 患者の力を活かす看護
	安全・安楽な援助	安全・安楽な援助
看護マネジメント	チーム医療における看護師の役割	看護師の役割と責任 看護チーム内の連携 多職種との連携と協働 メンバー間の協調性
	医療事故防止	医療事故防止

った看護の実践についての学びの内容であり、170の記述から、〔看護過程展開の技術〕〔家族看護〕〔継続看護〕〔対象・経過別看護〕の4つのカテゴリーが抽出された。

〔看護過程展開の技術〕は、一連の看護過程を展開する中で、観察の重要性とアセスメント能力の必要性を改めて感じ、根拠に基づき予測性をもって看護を実践したという体験を意味しており、＜看護過程展開技術＞＜観察の重要性と患者把握＞＜根拠に基づく看護実践＞＜予測性のある看護＞＜継続したかわり＞の5つのサブカテゴリーで構成された。「患者の状態に合わせた看護問題や長期目標を考えることが重要」「一瞬一瞬の観察がとても重要で患者の経過を見て一歩先を考えることで合併症を予防できる」「医学的根拠をもって、ケアとして関わる際も患者に必要なことを常に考えながらケアを行っていくことが必要」「患者の今後の経過を予測し看護することが大事」「計画を詳細に挙げて行くことで誰が行っても同じケアが行え、ケアの継続ができる」などの記述があった。

〔家族看護〕は、家族看護の定義をふまえ、背景としての家族、全体としての家族、システムとしての家族、社会の構成要素としての家族について学んだ内容であり、＜家族看護＞の1つのサブカテゴリーで構成された。「家族が患者に関心を向け続けることができるよう、ケアと一緒にい家族を巻き込んでともに患者をみていくよう働きかけることが大切」「ターミナル期においては、家族に対するケアも大切」「患者だけでなく、家族のケアを行っていくことも必要」「社会面として家族とのかかわりがとても大切」などの記述があった。

〔継続看護〕は、医療機関内において、また医療機関から他の医療機関・施設・在宅等での一貫した看護サービスの提供した体験を意味し、＜継続看護＞の1つのサブカテゴリーで構成された。「退院後の継続した看護の実践のために看護師が行っていることを学ぶことができた」「退院後の継続した看護や転棟調整には他の病棟との連携が必要である」などの記述があった。

〔対象・経過別看護〕は、高齢者に関する看護の特徴や経過別の特徴的な看護の体験を意味し、＜周手術期看護の特徴＞＜急性期看護の特徴＞＜慢性期看護の特徴＞＜終末期の看護＞＜高齢者看護の特徴＞の5つのサブカテゴリーで構成された。「回復過程では、すべてが順調にいくものではなく、合併症や創傷治癒遅延による手術の侵襲の大きさと手術前の患者の状態が非常に重要だとわかった」「急性期では一歩先に目を向けてケアを予測し、すばやい準備・実施をしていくことが大切」「慢性期はケアも生活の場も変化がなく、気分転換活動というのはすごく大切である」「ターミナル期におけるケアは患者さんが少しでも安楽に、快適な治療と環境が大切」「高齢者の看護における『予防』の大切さを学んだ」などの記述があった。

4) 看護の質

【看護の質】は、看護介入によりつねに最良の看護が提供できるように、その質を向上させるために必要な看護についての学びの内容であり、118の記述から、〔患者中心の看護〕〔個別的な看護〕〔安全・安楽な援助〕の3つのカテゴリーが抽出された。

〔患者中心の看護〕は、患者が何を望み、何を必要としているのかを第一に考え看護を提供した体験を意味し、＜患者にとって最善の看護＞＜患者の立場に立った看護＞＜患者に必要な看護＞＜患者に合った看護＞の4つのサブカテゴリーで構成された。「患者にとって最善とは何かを考える」「常に患者の立場に立って何が必要かを考えることがよりよい看護実践に重要だ」「相手のことを考え必要な時に必要な看護を行うことが大切」「患者が快く思えるその患者にあった看護提供が大切」「手浴を行うにしても患者さんの状態に合わせた方法で行うことで効果的なケアを提供できる」などの記述があった。

〔個別的な看護〕は、どのようにかわれば患者によりよい変化をもたらすことができるのかを考えて看護を提供した体験を意味し、＜個別性のある看護＞＜自立の促進＞＜患者の力を活かす看護＞の3つのサブカテゴリーで構成された。「看護は個性が大事で、その人の生活習慣に合わせて看護を実践していくことが必要」「一緒に頑張る姿勢や掛け声、できることは自分でやってもらい、自立に向けた看護が大切」「患者の状態を把握しながらできることを伸ばすことが大事」「残存機能の把握と潜在能力を活かした援助が必要であると考えた」などの記述があった。

〔安全・安楽な援助〕は、看護提供の内容・方法において、その安全性・安楽性を保証することを前提として実践した体験を意味し、＜安全・安楽な援助＞の1つのサブカテゴリーで構成された。「意識障害の看護では、全介助のため安全・安楽を考えた援助の大切さを改めて理解した」「患者に負担をかけないケアの提供には準備段階から注意して行っていくことが大切」などの記述があった。

5) 看護マネジメント

【看護マネジメント】は、看護専門職としての個人の姿勢を基に、チーム医療を展開するにあたっての看護師の役割と連携についての学びの内容であり、92の記述から、〔チーム医療における看護師の役割〕〔医療事故防止〕の2つのカテゴリーが抽出された。

〔チーム医療における看護師の役割〕は、看護師としての役割と責任、看護チーム間での連携や多職種との連携と協働について体験を通して学んだ内容で、＜看護師の役割と責任＞＜看護チーム内の連携＞＜多職種との連携と協働＞＜メンバー間の協調性＞の4つのサブカテゴリーで構成された。「一人ひとりが自分に任されたことに責任を持たなければ看護が提供できない」「ナースと報・

連・相を密に取り、情報を共有し合うことがチームナーシングにおいて最も大切である」「多職種の中でも患者と関わる時間が長い看護師は、責任を持って連携を図らなければならない」「メンバーとの連携や協調性の大切さを学べた」などの記述があった。

〔医療事故防止〕は、事故防止をつねに考え、患者の安全を守る看護実践を体験したことを意味し、「小さなミスが大きな事故につながるので、一つひとつの動作を確実に注意しながら行いたい」「ケア提供には同時にリスクを背負っている」「転倒や危険に対する認識が少しでも持てるように声かけを行った」などの記述があった。

VI. 考察

1. 成人看護学実習における実習目標(5)に関する学び

学生は、看護の対象に出会い、言語的あるいは非言語的〔コミュニケーション〕の重要性を学び、工夫しながら対象とかわっていた。そして、患者と患者を支える家族を看護の対象ととらえ、その心理状況にまで深く迫り〔看護の対象の理解〕をしていた。また、〔看護の対象の理解〕には、対象との〔コミュニケーション〕とともに、日々のかかわりの中で日常生活などの援助を丁寧に積み重ねることが大切で、それらにより対象との信頼関係が形成され、〔援助の人間関係の形成〕をみ、〔援助の人間関係の成立〕に至っていたと考える。

学生は、日々の看護実践の積み重ねにより対象が変化することを実感し、そこに看護実践による喜びとやりがいを見出していた。一方で終末期の患者により添い、自己の死生観・価値観を育みながら〔看護観の形成〕に至っていた。また、自己の看護を振り返り洞察する中で、あるべき看護師の姿勢や学習者としての姿勢に辿りつき、そこに自己の課題を照らして看護専門職者としての自覚が芽生え、〔看護専門職者としての姿勢〕を見出していたと考える。そして、看護を実践するためにはインフォームド・コンセントが必要不可欠であることを学ぶと共に、そこには患者の尊厳と生命の尊さという人間の根幹に関わる〔看護倫理〕が大前提として存在していることを認識し、〔看護観を確立〕させていったと考える。

また学生は、〔安全・安楽な看護〕を基盤として、時には患者の立場に立って考え、看護判断の基準を「患者にとっての最善」に置き、〔患者中心の看護〕を提供しようと努力していた。さらに、患者個々の能力を引き出し、もてる力を活かし、自立を促進していくことが〔個別な看護〕であることに気づき、患者が回復に向かうことを実感し、看護実践における〔個別な看護〕の重要性を学んでいた。そしてこれらの実践が〔看護の質〕に繋がっていったと考える。

そして学生は、質の高い看護実践のために、人体の構

造学や病態学、治療学、看護学等の基礎知識が情報収集やアセスメントには必要不可欠な要素であることを改めて学んでいた。また、知識と根拠をもち、予測性のある看護を展開するという〔看護過程展開の技術〕の重要性とその具体的方法を、体験を重ねつつ習得していったものとする。そして、患者を支える家族やその背景の心身を理解し看護する〔家族看護〕、看護師間、多職種との連携、医療機関内や他施設との連携・調整等の〔継続看護〕、患者個々の特徴や経過別による特徴をふまえた看護を提供する〔看護実践力〕を学んでいたと考える。

本研究で〔看護マネジメント〕が抽出されたことは、成人Bが学生にとって2回目の成人看護学実習であったことから、実習の展開状況が把握できていて、看護の対象だけでなく対象を支えている周囲の医療チームにも視点が向いたからではないかと推察する。また成人Bは、3週間の実習が終了した時点で引き続き4週目に統合実習の看護管理実習を展開したため、自分自身が学生間で協調性をもつことチームも医療の第一歩であることや、看護チーム内や多職種との連携と協働、看護師の役割と責任などの〔チーム医療における看護師の役割〕についても理解が深まったものとする。さらに、自己の看護実践や見学等を通し、看護師が提供する看護にはつねに医療事故の危険性が表裏一体で存在しており、〔医療事故防止〕の意識化と実践することの重要性を理解し、〔看護マネジメント〕として学びを深められたと考える。

2. 各カテゴリーの関係性(図1)

1) 看護観の確立と看護実践力、看護の質

看護観はその人が看護を実践するための根幹となる考え方であり、看護基礎教育において学生個々が看護観を育むことへの支援は、教員にとって重要な役割の1つである。また、「学習の体験を洞察し、看護観を発展させる」ことは成人実習の目標である。

今回抽出された〔看護観の確立〕は、〔看護倫理〕〔看護観の形成〕〔看護専門職者としての姿勢〕の3つのカテゴリーで構成されていた。看護実践は本質的に倫理的であることが要求される営み³⁾であり、看護実践力は看護観を基盤にし、知識、技術、態度の統合されたもの⁴⁾である。実習での体験を洞察し、看護者として、また看護を志している学習者として〔看護専門職者としての姿勢〕をとらえ、「看護とは何か」を考え、認識する契機となっていたと考える。

鈴木は、「学生が看護観を形成し、充実させていくのに最も確かな教育方法は臨地実習である」⁵⁾と述べ、さらに「看護実践力の向上には看護観の育成・充実が不可欠であり、このことによって看護の質が向上する」⁶⁾と述べている。成人Bにおいて学生は、看護を実践しながら〔看護実践力〕を習得する過程で看護観を形成し、その自己の〔看護観の確立〕により、さらに〔看護実践力〕が向上するとい

う体験をしていたと思われる。

2) 看護マネジメントと看護実践力, 看護の質

【看護マネジメント】では, 看護チームのメンバーとしての体験を通して, チーム医療における看護師としての役割を適切に果たすための技術を学んでいた⁷⁾と考える。これは, 組織の管理者としてではなく, 一人のメンバーとして日々の看護をマネジメントする能力の必要性を示している。また〔医療事故防止〕は看護マネジメントにおいて重要で, これを無くして【看護の質】は保障されない。また, 〔医療事故防止〕には, 根拠や予測性をもった【看護実践力】が必要である。自己の役割に対して責任を持ち確実に行うこと, すなわち【看護マネジメント】する力は, 【看護実践力】に必要であると同時に【看護の質】の保障においても欠かせない能力であると考えられる。

3. 教育方法への示唆

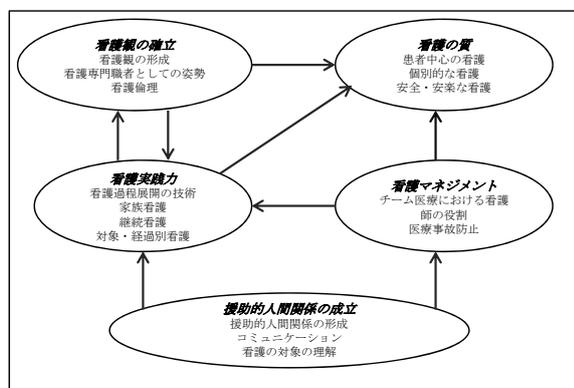


図 カテゴリーの関係

1) 看護実践力の育成のために

成人看護学実習では「看護過程を展開する能力と態度を養う」ことを実習の目的としている。看護実践力を育成するためには看護過程展開の技術の習得が必須である。本研究では, 看護過程展開の基盤となる考え方として問題解決に必要な力⁸⁾の, 「実践結果の確認」および「客観的評価の実施」についての記述が少なかつた。理由として, 実習展開の中では日々実践した看護の振り返りとその積み重ねの結果として初期計画の評価・修正を行っていたことから, 「看護の評価」の重要性の認識の低さがあつたことが考えられる。特に初期計画の評価・修正については, 実習の展開上, 評価し計画を修正した後に実践をする時間がほとんどなかつたことや, 記録用紙の活用方法がその要因であつたと思われる。今後は, 看護実践力を育成するために, 実習の中で評価の意味と方法の理解を促していくこと, 記録用紙の見直し, また実習展開についても検討が必要であることが示唆された。

2) 看護観の確立のために

浅井ら⁹⁾は, 「実習での体験がどんなに豊かであっても, その体験の認識が学生の意識化に至らなければ, 主観的

な体験で終わってしまう」と述べている。本研究で対象とした実習総括記録の実習目標 (5) は, 「学習の体験を洞察し, 看護者として自己の価値観, 死生観, 看護観を発展させる」であり, 「看護観」についての考えをまとめた記述を求めてはなかつた。しかし, 本研究で【看護観の確立】が看護実践力, 看護の質の向上に影響していることが明らかになったことから, 今後, 「看護観」として体験の認識を意識化させるために言語化することの必要性が示唆された。

3) 実践した看護の洞察

看護学実習を, 学生が既習の知識・技術を基に対象と相互行為を展開しつつ, そこに生じた現象を教材として看護実践能力を習得する授業¹⁰⁾と杉森は定義づけている。本研究から, 学生は実践した看護とそこでの対象の事実としての反応を振り返り, 洞察することによって体験を意味づけ, 臨床の知として自己の中に蓄積していくことがわかつた。しかし, 目の前で生じた現象はともすれば意識化することなく通り過ぎることから, その場面をいかに教員が教材化することができるかが重要な鍵を握っていると思われる。看護教員自身の感性と看護実践力が問われている。

謝辞

本研究にご協力くださいましたC短期大学看護学科3年生の皆さまに深く感謝いたします。

文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。2011。
- 2) 杉森みどり, 舟島なをみ：看護教育第4版。医学書院, 2009。
- 3) 大日向輝美, 堀口雅美, 酒井英美：初期看護学実習における学生の倫理的体験に関する検討。札幌医科大学保健医療学部紀要, (5), 35, 2002。
- 4) 鈴木良子, 芝藤恵：看護学校と臨床との連携で看護観を育む。看護教育, 43(3), 176, 2002。
- 5) 前掲4)
- 6) 前掲4)
- 7) 林千冬, 岩本里織：看護学概論。医学書院, 237, 2012。
- 8) 坂下貴子：基礎看護技術 I。医学書院, 184-187, 2011。
- 9) 浅井直美, 小林瑞枝, 他：看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造。Kitakanto MedJ57, 12-27, 2007。
- 10) 前掲2)

柘野 浩子・塩見 和子・磯本 暁子・掛屋 純子・小野 晴子

**Students' learning through Adult Nursing Practicum B experiences
- An analysis of clinical practicum records -
School of Nursing, Adult Nursing**

Hiroko TSUGENO, Kazuko SHIOMI, Akiko ISOMOTO, Junko KAKEYA, Haruko ONO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study aimed to identify students' learning and understanding of practicum objective No. 5 of Adult Nursing Practicum B, and examine effective teaching strategies. A qualitative and inductive approach was employed to analyze descriptions of clinical practicum records. As a result, the following 5 core categories were extracted: "establishing a helping relationship", "establishing a personal philosophy of nursing", "clinical nursing competence", "the quality of nursing care and services", and "nursing management". The findings suggest that: 1) To establish a personal philosophy of nursing, it is helpful for students to think about what they experienced and learned through practicum placements; 2) To enhance nursing competence, it is necessary for teaching staff to provide students with guidance on the evaluation of nursing practice and care delivery; and 3) To attain clinical wisdom, it is important for students to reflect on the delivery of nursing care and explore the implications of such practices/experiences.